

---

# Kiss me Baby!!

七浦彩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

K i s s m e B a b y ! !

### 【Nコード】

N 5 1 9 0 A

### 【作者名】

七浦彩

### 【あらすじ】

バレー部の桜井と芳川。二人は背の高さも部活での立場もぜんぜん違う。

牛乳はやっぱ風呂あがり、それも川上3・6牛乳に限る。

あの独特なフォルム、ストローを刺した時の紙臭さ、青いパッケージの上にさりげなく配置された、牛乳になんの関係もなさそうなハトのイラスト。最高だ。全てが完璧だ。

俺は一日一リットルの飲乳を心がけている。給食の時残った牛乳は全て俺が飲む。俺は牛乳が好きだ。この世で最も尊い飲み物だと確信している。

カルシウムをふんだんに含んだ、背を伸ばすための唯一の薬。成長期まっさかりの俺には、欠かしてはならないものだ。

牛乳をばかすか飲み始めて、もう半年になる。

だというのに。

「はいっ桜井君一四三センチね！ 声変わりまだかしら？」

保健の先生のムダに明るい声が保健室じゅうに響き渡った。そりゃないよ先生。体重は秘密にするのに身長は公開かよ。

しおしおと体重計の列に並ぶ俺の肩に、たくさんの手が乗った。

「可愛いなあ隆明は」

「ファイト」

「頑張れよ」

「俺の牛乳やるよ」

級友たちの暖かな励ましに応える気力も、もう俺には残されていなかった。俺は古びた体重計に乗った。また少し減ってしまった体重を申告された。

へこみっぱなしで保健室を出た俺を待ち構えていたのは、同じクラス的女子軍団だった。

「たかあきい、元気出せよっ！」

「まだ伸びるつてえ、ヘーキヘーキ！」

聞かれていたのか。うわあもおやだなあ、今すぐこの世から消え

去りたいよ。どこまで聞こえていたんだろう？

そろそろ女子たちの列に目をやると、彼女が　芳川涼子が、小さく、ファイト、のポーズをキメていた。俺はますますヘコんで、前後不覚の状態に陥った……。

彼女の痺れるようなアタックを初めて見てから、もう半年になる。芳川は一年ながらもジュニアバレーチームに入っていたことを買われて、即うちの女子バレー部のスタメン入りを果たしていた。俺は背が低いとはいえどバレーが好きで、けれど男子のジュニアバレーチームというのはなくて、中学に入ってやっとバレーができると喜んでいて、そんな矢先のことだった。

べしべし容赦なくボールが飛んでくる中、ビビりながら球拾いをやっていた俺は、ふいに聞こえた鋭いホイッスルの音に思わず顔を上げた。

その瞬間、ただでさえ高い背をさらに精一杯反らして、まるで羽根を生やしたように軽々と跳んだ彼女の姿を見た。そしてそのしなやかな手にボールが吸い付き、また放たれたのを、俺はスローモーション映像で記憶している。

ボールはものすごい速さと強さで、体育館の床の上を一回跳ねて、ぼうつとしていた俺の顔に直撃した。

忘れたくないような、忘れたいような、鮮烈な思い出だ。

俺はその日彼女に恋をした。アタックがきれいだった、というのも理由の一つだが、その後気絶してしまった俺にずっと付き合ってくれていた、というのもだいぶポイントが高かった。彼女は誰よりも練習をしなくてはならない立場だったのに、まぬけな理由で倒れた俺が目覚めますまで、ずっと保健室にいてくれた。目を覚ました時最初に見た彼女の心配そうな表情と、大丈夫、と問いかけてくる優しい声に、俺はずぎゅんとやられてしまった。

それから俺は一日一リットルの飲乳を自分に課している。彼女の身長は聞いたところによると（まだ俺と同じ十三歳なのに！）、一

六八センチあるそうだと。二十五センチの差は大きい。そう、例えば、例えば、だ。こう、その、きす、などを、する時にだな、彼女がかがんで俺が背伸びする、という強烈に恥ずかしい構図になってしまうわけだ。

けれど現実には厳しく、半年の間に成長のきざしが見えたことはなく、俺はずっとこのままだった。もしかして一生このままなんだろうか。想像するだに恐ろしい。

バレーの方でも俺の力は伸びない。胸に描く理想と現実とは違う、ということを実感させられている真つ最中だ。

芳川涼子に追いつきたい。背も、バレーの技術でも。小さな俺の目標は、打ち砕かれっぱなしでいる。

本日も牛乳が五パックほど残っていた。俺はそれを全部飲み干した。半ばやけっぱちになりながら、だけれど。

紙パックを押しつぶす勢いで牛乳を飲む俺を、みんなが笑っていた。芳川も笑っていた。涙が出そうだったけれど、男の根性でどうにかこらえた。

虚しい一日を終え、部活の時間がやってきた。走りこみはキツイし、球拾いはいまだに怖い。やっと打たせてもらえるようになったサーブもへなへなしている。背が低いせいでブロックもアタックもさせてもらえない。

それでも俺は毎日さぼらず部活に出ている。もちろん芳川を見るためだ。クラスにいる時の芳川と部活にいる時の芳川はだいぶ違う。きりつとしていて、どこか遠いところにいる。

手を伸ばして、走れば届く場所にいるのに、遠い。遠すぎて、泣けてくる。

思い切りボールに打ち据えた右腕が熱を持ち始めるまで、俺はただただサーブを打ち続けた。

大会が近いということで、体育館の外が真つ暗になるまで部活は

続いた。冬が近付いて、日が落ちるのが早くなっているせいもあるのかもしれない。ともあれバレー部の男子部員は安全のため女子部員と一緒に帰ることとなった。

またな、じゃあね、また明日、というやりとりを繰り返して、俺は薄暗い灯りの乏しい道を無言で歩いた。夜の空気がさらさらして、少し冷たい。これから、寒くなるな。そう思っ、俺は両手をこすり合わせた。右手が少し痛かった。

「桜井、サーブの時力みすぎだよ？」

「ぎよわ」

俺は思わずカエルのような声を出してしまった。まだ誰が残っていたとは思わなかったのだ。

振り返ったら、かぼそい電灯の明かりに照らされた、芳川の顔が見えた。なんでよりによって芳川なんだ。そもそもなんで帰り道が同じなんだ。知らなかったぞ？

「よよよ芳川もこっちなのか」

「よよよ芳川はこっちだよ。いつも桜井の後ろ歩いて帰ってたのに、気付かなかった？」

「き、気付きませんで」

ふーはーと深呼吸する。落ち着かなば。落ち着かなば。

「えと、サーブ力みすぎって、……どゆこと？」

ようやく普段どおりのいつもクラスや部活で接しているように、なんの気も無いような態度に戻して、俺は芳川を見上げた。至近距離で見ると首が痛い。俺は半歩ほど後ろに下がった。

「んーとね、なんか無駄な力が入りすぎなんだよね。特に右手降る時。こう、ね、ずっと上に上げてあげるみたいにすれば上手く飛ぶよ」

芳川はしなやかな動きでそれを実演してみせた。けれど俺にはどこがどう違うのかわからない。首を傾げつつ芳川のやっている通りにやってみた。一振りすることに芳川が首を横に振った。

「違う違う。こう」

と、芳川は何を思ったか俺の手をとって、ちょうど書道の先生が書き方を教える時みたたくサーブの力の入れ方を俺の腕に伝えてきた。温かい手、柔らかく背中当たる、芳川の何か。一瞬何が起きたかわからなかった。事を理解した次の瞬間、変な電気みたいのが手から背中から全身へと巡った。俺は夜で辺りが薄暗かったのを心から感謝した。俺の顔は茶が沸かせそうなほど熱くなっていた。

「こ、こう」

「そう、こう」

ばっくんばっくん鳴る心臓を抑え、俺は教わった通り腕を降った。芳川が満足そうな顔をしていた。新しく見た芳川表情。けれど俺の頭の中はパニックでそれどころではなかった。

俺はそれ以上の会話を慎み、早々に芳川を送り届けて家に帰った。夕食の味は何もわからなかった。風呂に入っても、芳川の柔らかい香りが俺につきまとっていた。

視力や聴力、腹の中など体中の検査が全て終わると、俺たちは女子と男子に分けられて、女子は視聴覚室へ、男子はしし教室へと集められた。

見させられたビデオは、やっぱりというかなんとというか、性教育ビデオだった。女の子を大事にしようね、の一言で片付けられそうな前半と、異性に興味を抱くことは悪いことではないのだよ、バンバン恋しなさい、と叫んでいるような後半で構成されていた。昨日の今日だからどうリアクションしていいかわからなかった。

つまらなそうにあくびする奴、にやにや笑ってる奴、真剣に見てる奴。俺は「こいつ超興味シンシンなんじゃねえの」と思われるのが嫌だったのでだるそうに机に突っ伏しながらそれを見た。おそらくクラスの奴らほとんどが俺と同じ気持ちだったと思う。みんなそれっぽいポーズをしていたから。

ぐだぐだな一時間を終え教室に戻ると、先に帰ってきていたらしい女子がひそひそと話をしていた。俺たちが戻ってきたのに気付く

と、慌ててやめたが。

「お前ら何見たんだよ」

気の利かないことで有名な山本がはつきりすっぱりと女子グループに聞いていた。女子はみんなほんのり顔を赤くして、黙っていた。そんな中芳川は一人涼しい顔で、こう切りかえしてきた。

「正しい恋をしましょう、ってビデオ」

俺がさらに芳川への思いをつのらせた、ということは、言うまでもない。

授業を終え、かつたるい「こころの相談」の時間も終え、俺はいそいそと部活に向かった。うちの中学ではお節介にも担任がクラス全員一人ずつを呼び出して、何か不満事はないか、悩みはないか、ということ聞いている時間がある。一学期にだいたい二回。教師によって違う。

友人関係、クラブのこと、その他もろもろ。悩みなんてないって何度も言っているのに、今年初めて担任するクラスを持ったという先生はしつこくいろいろ聞いてきた。仕方ないので身長を伸ばす方法を聞いたら、好き嫌いせず野菜も食べなおかつカルシウムを摂ること、とありきたりな答えが返ってきて少しがっかりした。

まあそんなことはどうでもいい。早く芳川に教わったサーブの威力を試したい。俺は教務室の近くの窓から内履きのままで中庭に出た。体育館と教務室は中庭を挟んで真向かいにある。本来なら渡り廊下を渡ってずっと遠回りしなくてはならないのだが、それをするのもおつくうなほど、俺の心は跳ねていた。

見つかからないようもともと低い背をなお縮めて歩くと、ミニトマトが植えてある花壇の方から人の声がした。やべえ、ととつさに植え込みに隠れると、その声がよく知ったものであることに気付いた。

女子バレー部の、元スタメンアタッカーの先輩の声だった。

いい気になってんなよなんだよその目ム力つくんだよお前が来たせいでチームバラバラになってんのまだ気付かねえのかよふざけん



なよ何が元ジュニアチームだよ関係ねんだよ。

圧倒的な悪意。それをまともに受け止めている相手は、簡単に予測できた。

新しくアタッカーになった、人間。

俺は意を決して、わざと植え込みをがさが言わせながら花壇の方へと走った。今まで聞いた中で一番汚い声が止み、足音がそくさと体育館へ向かった。

ぼうつと呆けた顔をしている芳川と目が合った。芳川は俺の顔を見ると、小さく、儚げに苦笑した。

「……見られちゃったかあ」

芳川のそんな表情は見たくなくて、俺は制服のままの芳川の、胸元の青いリボンに視線を落とした。

「芳川、いつもあんなこと言われてるのか」

やりきれなかった。きれいだと思っていた。みんながそう思っている、バカな俺はそう思い込んでいた。

部活の時の芳川が、遠くに感じる理由。それは芳川があんまりすごすぎるからじゃなくて。

芳川が、周りのみんなを拒んでいたからだだったんだ。

「いつもじゃないよ。今日はたまたま……」

「嘘つくなよ！」

俺は情けなくもまだ青色のリボンを見たまま叫んだ。涙がばたばた、勝手に落ちてきた。あんなに芳川を見てきたのに、俺は何一つ気づいてやれなかった。

「うそつくなよ……」

喉が詰まった。息ができなくなった。俺はリボンすらも見る事ができなくなつて、うつむいた。

「ねえ、桜井」

頭の上の方から落ち着いた声が聞こえてきた。

「一四三センチの世界って、どんな感じ？」

いきなりの質問に顔を上げると、芳川はいつもの芳川に戻ってい

た。

「あたし二次成長期早く来ちゃったからさ、もう身長伸びるの止まったんだ。すぐだったよ、ここまで来るの。だから憶えてないんだ。一四三センチの世界」

芳川は目を細めて俺を見た。昨日サーブを教えてくれた腕が、俺を抱き締める。

「憶えてないから、わからないんだ。そういう人の気持ち。バレーを中学に入ってから初めてやった人の気持ちとか、いろんな人の気持ち」

近くで見た芳川の肩は、俺の腕にもすっぱり収まりそうなくらいで。

「だからあたし冷たいって言われるのかな」

芳川の声が、震えている。たまらなくなつて、俺は芳川の背中に腕を回した。

「冷たくないじゃん。俺にサーブ教えてくれたじゃん」

こんな言葉がどこまで芳川の救いになるのかわからなかったけれど、俺は言わずにいらなかった。

「他の奴の気持ちなんか知らなくていいよ。芳川はすごいよ。芳川がいなくちゃ俺だめだよ。芳川が……芳川が、芳川だから、俺は好きになつたんだし、芳川がいるから、バレー、きつついけど辞めたくないし！」

思いつく限りの言葉をつないで、俺は芳川をきつく抱き締めた。はたから見たら俺が芳川にしがみついているように見えるだろう。この際そんなことどうでもよかった。

「だから、芳川。あんなのに負けるなよ。芳川が選ばれたのは芳川が頑張ったからだろ？ あいつらよりずっと前から頑張ってたからだろ？ それすげえじゃん！ だから……」

右の頬に、ふわ、と柔らかいものが触れた。我に帰ってみると、芳川のおいが強く感じられた。大変なことを口走ってしまった気もする。そして、そして何より、今頬に触れているものは何だ？

俺はそろそろと目を右にやった。

芳川が、俺の頬にキスをしていた。

「ありがと、桜井。あたしも桜井のこと好き」

気が動転した俺は硬直するしかなかった。

「桜井がいるなら、もう少し頑張ってみるよ、バレー」

そう呟いて、芳川は俺の耳に唇を近づけた。

「桜井が、ちっちゃくても頑張ってる姿がね、あたしの励みだったんだ」

ちっちゃくても、がひっかかったけれど、芳川が俺を見てくれたこと、俺を必要としてくれていたことが、嬉しくて仕方がなかった。

「な、なら……頑張ろう」

必死でそれだけ言った俺に、芳川は最高の笑みを返した。

「うん、頑張ろう！」

俺たちは急いで体育館に向かった。揃って遅れた俺たちに一瞬非難の視線が向けられたが、俺も芳川も気にしなかった。

俺の打ったサーブは高く飛んで、びし、と床を叩いた。芳川が笑っていた。あの遠さが、なくなっていた。

朝、登校したと同時に、山本に丸めた教科書を向けられた。

「ちびっこ桜井君、身長二十五センチ差の彼女を持った感想をお聞かせください！」

どうやら教科書はマイクの代わりらしい。俺はうるたえて、どこでそれを、と墓穴を掘ってしまった。

「中庭であんだけ熱烈にやってたらみんな気付くって」

芳川を見ると俺と同じように質問責めに遭っていた。だが芳川は眉一つ動かさず、冷静に、うーんチワワみたいで可愛かったからカナ？ などとぼざいていた。芳川は俺の恨めしそうな視線に気付くと、おはよう、と爽やかな笑顔を見せた。

「桜井ー、これあげる！」

しゅ、と投げられたのは朝イチ絞りたての川上3・6牛乳。青い  
パッケージにハトのマークが目印だ。

「早くおつきくなつて、今度は唇にキスしてねえ」

ざけんじゃねえやい。俺は芳川の新しい一面に涙した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5190a/>

---

Kiss me Baby!!

2010年10月8日15時59分発行